

# キャリア教育を視点とした教師の意識変容の学習に関する事例研究

豊田 隼\*・山田 智之\*\*・笹山 雄大\*\*\*・

沼田 大輝\*\*\*\*・福田 一仁\*\*\*\*\*

(令和4年9月8日受付；令和4年11月24日受理)

## 要 旨

VUCA時代の渦中、学び続ける教師像とキャリア教育の必要性が高まっている。本研究は、キャリア教育に関する教師の意識や捉え方、意識変容について実態を把握し、キャリア教育における教師学習に資する一資料を得ることを目的とした。実態把握・学校連携により・連携協議会・学校連携パスポートを主たる手立てとして調査介入研究を実施した結果、既存のキャリア教育に対する捉え方や専門的知識の内容的な具体化が促され、日々の教育活動におけるメタ認知的な価値付けに寄与する結果を得た。また、これらの手立ては、教師個々およびチームとしての意識変容の学習を促す機会となり、学校教育全体で取り組むキャリア教育に向けた実践的基盤の形成に資する教育的示唆を得る事例であったと考えられる。

## KEY WORDS

career education キャリア教育, teacher education 教師教育, professional development 能力開発

## 1 問題の所在

VUCA時代の渦中である現代、Society5.0時代の到来や新型コロナウイルス感染症の影響による社会変化に伴い、教育現場のみならず社会全体が非連続的な状況に置かれつつある。昨今のこうした社会構造の急激な変化に対し、例えば、OECD（2019）は、持続可能な社会の実現につなげていく学校教育の望ましい未来像を指し示す指針として“Learning Compass 2030”を掲げ、子どもたち個人と集団及び社会のWell-beingに向けた方向性を示した。文部科学省（2021）は、新しい時代を見据えた学校教育の姿を「令和の日本型学校教育」として取りまとめた。従来の日本型学校教育を発展させ、個別最適な学びと協働的な学びの一体化の実現を目指すとする同資料では、子どもたちが「自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成すること」を求めている。しかし、積極的な施策が取り組まれる一方で、近年の子どもを取り巻く課題は、いじめ等の生徒指導上憂慮すべき問題や家庭の社会経済文化的背景の格差、子どもの学習意欲の低下が挙げられ（文部科学省，2021）、子どもたちの心身の発達に関しては、高学歴社会における職業意識の低下や職業選択及び自己決定を先送りにするモラトリウム傾向の高まり（工藤，2017）、また、人間関係形成能力や意思決定能力及び自己肯定感の欠如、肯定的な未来志向性が乏しい（文部科学省，2011a；西岡，2018）といった心理社会的問題を孕んでいる。こうした生き方に関する諸課題に対応する体系的な教育方略の一つとして、キャリア教育が挙げられる。日本では、1999年にその必要性が提唱されて以来（文部科学省，1999）、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育（文部科学省，2011b）」として、キャリア教育で育成すべき力である基礎的・汎用的能力を基盤に、子どもたちの生きる力を育む中核的要素として重要な位置付けがなされている。平成29年告示の小学校及び中学校学習指導要領総則では初めてキャリア教育の文言が登場し、今日における「令和の日本型学校教育（文部科学省，2021）」構想においても、目指す子どもの学びの姿として「自らの将来を見通し、社会の変化を踏まえながら、自己のキャリア形成と関連付けて学び続けている（p.21）」ことを求め、義務教育課程における系統的なキャリア教育の充実が明記されている。加えて、コロナ禍後における労働環境や職業に対する意識変化に伴い、今後のキャリア教育の在り方を捉え直す必要性が指摘され（西村，2020）、全人的な成長を促し、学校教育全体で実践するキャリア教育に対して広範な期待に拍車がかかる状況である。他方、そもそもキャリア教育提唱の当初から、教師のキャリア教育の必要性に対する意識の醸成（文部科学省，2011b）が求

\*山梨大学大学院医工農学総合教育部

\*\*学校教育学系

\*\*\*上越教育大学(専門職学位課程)

\*\*\*\*NPO法人国際自然大学校

\*\*\*\*\*津幡町立津幡中学校

められているが、実践的課題は残存する現状がある。例えば、山崎・七條（2013）は、現場教師は子どもたちにとってキャリア教育が必要と捉えている一方で、キャリア教育の推進にあたり、その実践内容が不明瞭で具体化が為されていない点や時間の確保が課題であることを見出し、専門的知識充足のための教員研修の必要性を指摘している。工藤（2017）の見解では、教師は「職業・仕事・働く・キャリア・職業教育のそれぞれの意味や意義を理解する必要がある」と述べられており、様々な教育活動や発達段階との関連性を踏まえながらキャリア教育を積極的に推進する必要があるとされる。加えて、国立教育政策研究所（2020）の第一報では、キャリア教育の全体計画の作成は約8割の学校が実施しているが、年間指導計画の作成は約5割に留まっていることを明らかにし、小学校学級担任がキャリア教育を推進していく上で特に重要性を感じている「具体的な目標設定」や「教員間の共通理解の促進」は、学校自体が改善の必要性を自覚しつつも、多くの学校で十分に行われていない実態を示唆した。第二報（国立教育政策研究所，2021）では、子どもの「学習意欲や基礎的・汎用的能力の向上のカギを握るのは、担任が計画に基づいてキャリア教育を実施するかどうかである（p.27）」と子どもの意識レベルから言及しており、多くの教師が具体的且つ焦点化された目標設定や全体計画の作成プロセスに参画すること、それらを実践の中で常に意識できるよう可視化することが求められるとしている。また同報告書では、キャリア教育に関する授業実践が為されている学校や、将来について具体的な目標を立てること等に関しての学級担任による働きかけがある学校の子どもは、学びのレリバンス意識（学ぶことについて将来とのつながりや意義等について考える意識）が高いことを明らかにしている（p.121）。こうした背景を踏まえると、今後より一層重要度が増すであろうキャリア教育に関連する教師の意識を改めて把握し、その捉え方を明瞭化することは、当該教育活動に従事する教師自身の形成的な学びの促進に寄与し、学校教育全体で取り組むキャリア教育の実現に向けた実践的示唆を与える点で重要であると考えられる。

教師のキャリア教育に関する意識を捉えるに当たり、教師を含む成人学習の理論的側面に着目する必要がある。文部科学省（2021）によると、これからの教師の姿として求められるのは、「技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け（p.22）」ることであり、暗黙知の中で蓄積されてきた均質的な正解主義や学校文化における同調圧力への偏りから脱却することが重要とされる（p.8）。そもそも教師は、教授法について学び続ける「おとなの学習者（三輪，2018，p.112）」であり、佐藤（2015）は、生涯学習社会の到来によって、教師の専門家が“教える専門家”から“学びの専門家”へとシフトしていると述べている。成人は、長年に渡って獲得した知識と経験の蓄積を学習の場に持ち込み、新たな学習を助長するために、既存の固定的に形成された態度や思考パターンを必然的に持ち込む特質を有するが（Daines, Daines & Graham, 1988）、教師の意識変容が必要視され、職能成長を果たしていく期待が募る中（田中，2011）、教師の実践する多様な教育的手立てに関する力量形成、それに伴う自律的な資質能力向上は、喫緊の政策的課題である（文部科学省，2015）。こうした持続的な教師の専門性を有する刷新的学びが必要とされる背景の中で、伝統的には、Schön（1983佐藤・秋田訳2001）による反省の実践家としての教師像が提唱されて以来、省察を主軸にその専門職性概念に関する議論が進められてきた（e.g., 久我，2009）。その中で、生涯学習論の立場に立つと、成人の代表的な学習論として、Mezirow（1991金澤・三輪監訳2012）の変容的学習論やCranton（1992，1996）の意識変容の学習プロセスが挙げられる。これらは、学習者の有する自明の前提や既存の価値観を批判的に振り返ることによりもたらされる内面的変容に焦点化する点に特徴があるとされ（小池・志々田，2004）、「令和の日本型学校教育」が目指す教師の生涯的かつ自己形成的な学習観を検討する視点とも合致すると考えられる。とりわけ、Cranton（1992，1996）の意識変容の学習では、個々の学習者によってその変容的学習のプロセスには多様な相違があるとする点で、Mezirowの理論と弁別可能であり、学校教育における教師、即ち学習者の意識変容が実践知及び理論知に則した多様性を有することは明白であることから、彼女の論考は重要な意味を持つ。教師の成長と能力開発について、Cranton（1996）は、「より自律的・自立的になり、批判的なふり返りに取り組み、実践についての見方を修正するというプロセス」とし、意識変容の学習について、Cranton & Wright（2008）は、「個人が批判的な自己省察を行い、その結果、自己と周囲の世界をより開放的にさせ、浸透させ、より正当化された方略へと視点を深く転換させるプロセス」と定義している。このように、意識変容の学習の中核プロセスは、批判的なふり返り、即ち批判的省察であるとされ（Cranton，1996）、その方策プロセスとして、①前提を明確に述べる、②前提の源と結果を確定する、③批判的な問い直し、④代わりとなるものを想像する、という構成が示されている。以上のことから、現場の教師は、日々の教育活動や既存の教育観を高次かつ日常的に批判的な自己省察を遂行する必要があることは明らかと言えよう。従来、教師における変容的学習論に基づいた先行研究は幾つか散見され（e.g., 田中，2011，2016）、教師の学習内容を可視化し、メタ認知的な自己評価能力を醸成する重要性が述べられている（堀，2012，2019b）。こうした背景では、広義な教育実践に適応性が高い先行研究は見られるが、上述の通り、積極的に推進されているキャリア教育に焦点化し、より実態に即した教師の意識変容を具体的に可視化した研究はあまり見ら



れない。また、教師の学習ニーズとしては、依然として教科に関する専門的知識の枠に縛られている（藤森，2018）ことから、キャリア教育に関する教師の意識変容を検討する意義は十分にあると考えられる。

そこで本研究は、子どもの将来的なキャリア発達を支える基礎部分を構築する（吉武・西山，2011）とされる小学校を事例対象に、キャリア教育に関する教師の意識や捉え方、意識変容について実態を把握し、キャリア教育における教師学習に資する一資料を得ることを目的とした。

## 2 方法

### 2.1 調査対象校の概要と調査対象者

本研究における調査協力校は、北信越地域に位置するA小学校の1校である。調査対象者となる教師は校長を含む19名であった。各学年1学級から成る小規模公立小学校であるA小学校では、重点教育目標として、特に、人間関係形成能力、規範意識や社会性の育成、地域資源を生かした学習活動及び体験活動等の充実を掲げており、基礎的・汎用的能力（文部科学省，2011b）と対応する部分が多い。

### 2.2 研究の手続き

#### 2.2.1 実態把握

調査介入期間は2021年8月下旬から11月下旬までの約3ヶ月であった。実態把握として、具体的には、週4回各5時間程度、当該校を訪問し、児童への学習支援をはじめ、校外学習及び文化的行事等の各種活動へ参与介入する形で全体観察を実施した。また、キャリア教育に関連する教育活動に対する焦点観察を実施し、フィールドノートによる言語記録をオンラインストレージ上で訪問毎に行うことで、参与観察による解釈的アプローチを展開した。

#### 2.2.2 学校連携だよりの定期発行

日々の教育活動の文脈をキャリア教育的視点から意義付けして見取り、教育的力量形成の一助として提供することを目的として、「学校連携だよりの」を週1回の頻度で計16回発行した（図1）。本連携だよりは、大田区立矢口中学校（2019）や吉村他（2022）を参考に、横軸を生きる力を育むための「資質・能力の三つの柱（文部科学省，2017）」、縦軸をキャリア教育における「基礎的・汎用的能力（文部科学省，2011）」に郷土愛を加えた「新潟っ子を育むキャリア教育の視点（新潟県教育委員会，2011）」を採用したキャリアマトリックス表を用いて、日々の教育における実践的意義を可視化・整理し、キャリア教育的な理論知と教育現場における実践知の架橋を目指したものである。なお、作成に際しては、客観的且つ論理的視点を保証するため、内容に関しては、筆者らの所属研究室内協議及びキャリア教育学を専門とする大学教員との協議による重層的検討を行った上で調査協力校へ配布した。



図1 発行した学校連携パスポートの一例

### 2.2.3 連携協議会の実施

教師との直接的且つ定期的な意見交流及び議論の場を確保すべく、「連携協議会」を計2回実施した。具体的に、第一回（9/27）は、調査介入の方向性に関する説明及びキャリア教育学を専門とする大学教員によるガイダンス講義を実施した。第二回（10/25）は、これまでの学校連携だよりの意義に関した筆者らによる発表及び文化的行事を対象としたキャリアマトリックス表作成を教師と共同して行った。開催に際しては、教師と筆者らの共通認識を図りつつ、調査協力校の課題解決及び学びの伸長に資するよう、筆者らの所属研究室内協議で内容吟味をし、事前に研修担当教師と内容の検討を行った上で実施した。

### 2.2.4 学校連携パスポートの活用

意識変容の学習内容を形成的に評価でき、その機能的役割として適用可能と判断でき得る、堀（2019a）のOPPA（one page portfolio assessment）論を援用した「学校連携パスポート」を作成し活用した（図2）。堀（2019a）によると、OPPA論は、社会的構成主義の立場に依拠し、学習の過程や変容を明確化するため、学習前・中・後の履歴として記録し、学習者自身がその全体を通して自己評価を行う方法である。OPPA論は多様な教育実践検証への汎用性を有する（e.g., 中国・堀, 2017）ことから、本研究では、学校連携パスポートに記載された教示文に対して、調査対象者である教師に自由記述による回答を複数回求めた。そして、ここでの学習者を教師と捉え、堀（2019a）による本質的な問いの変容による自己評価に着目し、教師の自己評価省察に関わる本質的な問いを「キャリア教育とはどのようなものだと思いますか?」と設定した。なお、学習前後の本質的な問いは、同様の教示文である。

得られたデータの分析には、UserLocal AIテキストマイニング（<https://textmining.userlocal.jp/>）を用い、形態素解析及びテキストマイニング分析を実行した。解析にはTerm Frequency-Inverse Document Frequency法によって算出されたスコア（Tf-Idf値）を採用した。Tf（Term Frequency）は単語の出現頻度、Idf（Inverse Document Frequency）は逆文書頻度を表す。分析に際して、同義語及び複合語や除外語の設定、記述内容の一部整形等の前処理を施し、特徴的な意味を持つ複合語に対しては非分割認識を設定した。

図2 作成した学校連携パスポート

## 3 結果

### 3.1 キャリア教育の捉え方に関する学習前後の意識変容

診断的評価と総括的評価において回答を求めた、キャリア教育に対する捉え方に関する記述内容の比較検討を行った。第一に、診断的評価における回答記述の単語出現頻度の各品詞上位10語を表1に、ワードクラウド分析の結果を図1に示した。高頻度出現語を含む具体的記述は、「将来のことを考え、生きていくために必要な力をつけていく学びのこと」「子どもが自分の将来について考える機会、環境を整える」「将来のことを考える、知る、教育」などであった。第二に、総括的評価における回答記述を診断的評価と同様に示した（表2；図4）。高頻度出現語を含む具体的記述は、「自分の生き方を自分で考えていける子どもを育てる教育」「教育活動を充実させる大切な視点。子どもたちが自分の未来を幸せに生きるための選択をする力を付ける教育」「自分自身の人生を自分で考え判断し、生きていくために子どもの経験・学んだ知識能力適性をつなぎ育て、子ども自身が動くようにしていく取り組みのこと」などであった。



品詞		名詞		動詞		
順位	抽出語句	出現頻度	Tf-Idf値	抽出語句	出現頻度	Tf-Idf値
1	子ども	8	2.53	考える	8	0.18
2	将来	6	1.86	知る	4	0.04
3	教育	5	2.24	見据える	3	3.86
4	必要	2	0.04	育てる	3	0.31
5	自己理解	1	7.65	持つ	3	0.03
6	学級活動	1	7.65	返る	2	0.21
7	勤労	1	1.60	つける	2	0.02
8	道筋	1	1.38	身に付ける	2	7.65
9	心理的	1	1.20	見出す	1	2.94
10	学び	1	0.59	またがる	1	1.37

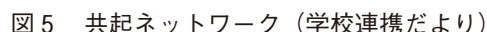
*note.* 各語句は出現頻度順に示した。



品詞		名詞		動詞		
順位	抽出語句	出現頻度	Tf-Idf値	抽出語句	出現頻度	Tf-Idf値
1	子ども	10	3.86	つながる	3	1.05
2	教育活動	5	49.84	育てる	3	0.31
3	教育	5	2.24	付ける	3	0.10
4	生き方	4	2.82	考える	3	0.03
5	視点	4	1.60	生きる	2	0.03
6	能力	4	0.76	育む	1	0.97
7	大切	3	0.21	広げる	1	0.09
8	資質	2	3.46	乗り越える	1	0.09
9	多様	2	1.81	学ぶ	1	0.05
10	将来	2	0.22	得る	1	0.02

*note.* 各語句は出現頻度順に示した。

形成的評価についての「学校連携だよりを読んで一番大切だと思ったこと」に対する計2回分の記述を用いて検討した。出現特徴語の各品詞上位10語を表3に、共起ネットワークを図5に示した。共起ネットワークは、単語の出現様式が類似したものを線で結び、共起程度が強いほど太く、出現頻度が多い語ほど大きく描画される。分析の結果、共起関係や文脈の共通性から、①教育に対する思いと実践内容の整理、②学校全体で取り組むキャリア教育に向けた評価機能、③日々の教育活動を理論知と統合する手立て、と解釈された。



品詞		名詞		動詞	
順位	抽出語句	出現頻度	Tf-Idf値	抽出語句	出現頻度
1	キャリア教育	6	40.70	意味付ける	1
2	自己理解	3	27.69	つながる	6
3	マトリックス表	3	27.69	育む	2
4	なでしこ祭	3	27.69	積み重なる	1
5	9つのキーワード	3	27.69	取り入れる	2
6	令和の日本型学校教育	2	17.29	とらえる	1
7	ICT	2	17.29	つなげる	1
8	フィードバック	5	12.95	努める	1
9	学び	6	12.05	補う	1
10	協働	2	8.40	心がける	1

*note.* 各語句は特徴語 (Tf-Idf値) 順に示した。

形成的評価においての「連携協議会で一番大切だと思ったこと」に対する計2回分の記述を用いて検討した。出現特徴語の各品詞上位10語を表4に、共起ネットワークを図6に示した。分析の結果、共起関係や文脈の共通性から、①キャリア教育に対する知識の深化と新たな視点の獲得、②資質・能力の三つの柱に対する理解と教育に対する姿勢の明確化、③多様な教育活動への自信の獲得、と解釈された。



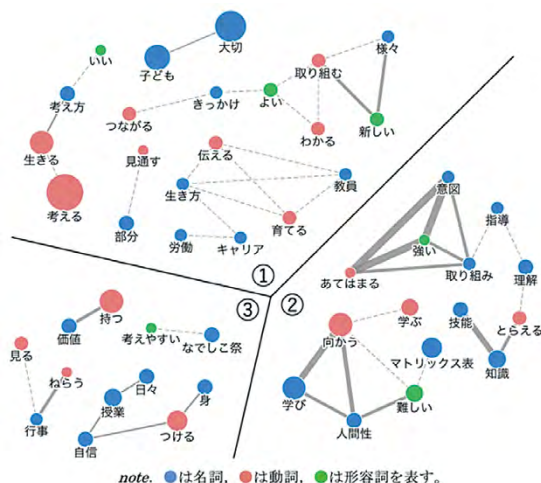


図6 共起ネットワーク (連携協議会)

表4 出現特徴語 (連携協議会)

品詞	名詞			動詞		
	順位	抽出語句	出現頻度	Tf-Idf値	抽出語句	出現頻度
	1	キャリア教育	11	84.16	とらえる	2
	2	マトリックス表	5	49.84	見通す	1
	3	なでしこ祭	3	27.69	当てはまる	1
	4	教育活動	2	17.29	ねらう	1
	5	学び	6	12.05	取り組む	2
	6	レジリエンス	1	7.65	生き抜く	1
	7	視点	7	4.47	つなげる	1
	8	技能	3	3.62	つながる	2
	9	ライフプラン	1	3.28	学ぶ	3
	10	多角的	1	2.65	向かう	5

note. 各語句は特徴語 (Tf-Idf値) 順に示した。

## 4 考察

本研究の目的は、キャリア教育に関する教師の意識や捉え方、意識変容についての実態を把握し、キャリア教育における教師学習に資する一資料を得ることであった。ここでは、学校連携パスポートにおける学習履歴の価値付けに該当するメタ認知記述を適宜参照しながら、Cranton (2006) の能力開発を視点として考察を試みる。ここでの能力開発プロセスは、①コンシャスネス・レイジングを通して自己認識を高める、②実践についての前提や信念を明らかにする、③前提を批判的に問うことに取り組む、又は他の前提を直観的に想像する、④他者と対話を行う、⑤洗練された実践の理論を発展させる、ことにより形成される (Cranton, 2006)。

第一に、教師のキャリア教育の意識と捉え方、学習前後の意識変容について、対象教師らには、将来を見据え、自己実現に向けた主体的な学びの向上を目指すものとするキャリア教育の知識が調査介入前の時点で既に備わっていたことが窺え、狭義な勤労・職業観に固執しない点で山崎・七條 (2013) らの見解を支持する結果を示した。調査介入後、即ち学習後には、既にあるキャリア教育に関する知識や思いに対して、その視点がより明確化し、実践的知識を伴う内容の具体化が促されたと考えられる。振り返り記述では「今までキャリア教育は大切と思っていたながら、実態がよく分からなかったところがあったのですが、連携を通して様々なキャリア教育の要素を可視化してもらったことで、自分の取り組んでいたことにもその要素があったのだということが分かって、すごく身近に感じることができました。」「自分がやっていたことに価値付けしてもらった感じがします。普段行っている授業にプラスαキャリア教育への視点をこれからも加え、授業の質をこれからも高めていけるようにしていきたい。」「日々の実践のなかにキャリア教育の視点が多々含まれていることに気づきました。…日々の営みこそキャリア教育そのものでした。教師の在り方は特に大切…存在そのものが指導だと思っています。…自分自身も、もっとこうありたいと強く願い、挑戦し続ける必要があり、一生続ける必要があり、一生続くものだと考えました。」等とあるように、キャリア教育的要素が日々の授業実践やあらゆる教育活動に深く根差していること、それに関する教育的意義を自律的に再確認したことで、今後の実践のより一層の充実に寄与する位置付けになり得るという、メタ認知的価値付けが窺えた。特に小学校では、学級担任の工夫次第で各教科領域を関連付けながらキャリア教育を推進できる可能性が充分にある (三村, 2008) ことから、本連携がその意識化に寄与したと考えられる。Cranton (2006) によると、学習者の心理的習慣を揺るがす経験は、別の新たな視点から自己認識を拡大させる機能を有し、教育に関する変容学習の基礎を提供するとされる。即ち、教師自身がキャリア教育に関する意識高揚を目指し、身近な自己の実践の前提や信念を新たな視点から見つめようとしたことは、能力開発の一端と捉えられる (Cranton, 2006)。加えて、こうした学びの深化が教師の教育観やそれに対する生涯展望に繋がったことは、本研究の成果として大変意義深いものである。

第二に、学校連携だよりの効果について、上記結果の通り、日々の教育実践の整理や教育目標の達成に向けた客観的評価、教師の理論構築の手立てとして機能したと考えられる。これに関連する振り返り記述にて「これまで、毎日の授業とキャリア教育と結び付けて考えることはありませんでした。連携だよりにて、自分が行った授業について、キャリア教育の視点で振り返ることができました。」「その場その場でしかやれないという思いがずっとありました。でも、こうして連携だよりで位置づけたものをFBしてもらって、そういうつもりでやったよとか、そうい

う価値にもなったのね、など色々な気づきがありました。…子どもたちの未来につながる…ところに改めて気づかせていただきました。」等が挙げられる。山崎・七條（2013）は、現場教師はキャリア教育が子どもにとって必要と考えている反面、実施内容が不明瞭で具体化が為されていない点や時間の確保が課題であることを調査から見出している。断片的な評価ではあるものの、日常的な教育活動からキャリア教育の要素を継続的に見取る本たよりは、上述課題点を解決するものであると考える。これらを踏まえると、今回の手立てが日々の取り組みの意図や目的を問い直し、その妥当性評価を促した点で能力開発として機能し（Cranton, 2006）、既存の教育観や実践に対する思いを批判的に振り返り、自己省察の促進的な機会として働いたことが示唆される。田中（2011）によると、「振り返りの機会と場」が教師の振り返りを深める際には必要であり、その「機会の継続性」を一つの促進要因として挙げている。また、その学習者個々の変容的な学習プロセスは多様な相違があることを踏まえると（Cranton, 1992）、各々の教師が自己の前提を問い直し、修正改善に向けた行動が分析結果から予測される点、深い振り返りが促進されていた点で一人ひとりの力量形成に寄与したと推察される。

第三に、連携協議会の効果について、上述結果の通り、キャリア教育における新たな視点の獲得や評価における資質能力の反省機会、教育に対する姿勢の再確認及び実践に対する自信獲得の手立てとして機能したと捉えられる。これらに関連した振り返り記述としては、「普段から行っている教育活動は…キャリア教育に分類できる…しかし、マトリックス表に分けてみることで、なかなか育まれていない視点もあることが分かった。そのような部分もしっかりと補うことができるよう、各視点や資質能力を育むための計画立てが今の自分に必要だ…」 「マトリックス表で学習発表会をテーマにして、職員で作成したことがとてもいい機会になった。日々の授業でつきたい力は、数年後の子どもたちのどんな姿につながっていくのかを考えていくことが学びに向かう力・人間性をより深めていくことになる…自立活動と…リンクする部分があると思い、特別支援教育から見るキャリア教育をもっと考えてみたいと思いました。」等が挙げられる。佐藤（2015）は、教員が学び成長するための「専門家の学びの共同体（実践のデザイン・活動・省察・共同の循環）」が必要であり、その実践的共同体は、一人ひとりの実践経験や専門的知識を相互共有し、熟達を促進し合うと指摘する。また、自己省察の土台とされる他者との討議によって振り返りの機会が齎され、不透明だった考えが明瞭化することにより省察が促進される（Cranton, 2006；田中, 2011）。これらを踏まえると、本研究を通じ、同僚教師と実践知を深めるための議論を交わす中で省察が深まり、その上で新たな教育活動を積み上げ、キャリア教育に関する理論的構築を促した点で、個々の能力開発の一助になったと推察される。加えて、Cranton & King（2003）によると、教えることに関する批判的な自己省察は、継続的に自分自身で専門性能力開発を行うための出発点になる。教師の学習内容の系統的な可視化及び自己評価能力の醸成（堀, 2019）に寄与できたことから、学校教育全体で取り組むキャリア教育の実現に向けた実践的基盤の形成に資する点で、その意義があったと考えられる。

## 文献

- Cranton, P. (1992). *Working with adult learner*. Toronto: Wall & Emerson.
- Cranton, P. (1996). *Professional development as transformative learning: New perspectives for teachers of adults*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Cranton, P. (2006). *Understanding and promoting transformative learning: A guide for educators of adults (2nd ed.)*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Cranton, P. & King, K. (2003). Transformative learning as a professional development goal. King, K. & Lawler, P. (Eds.), *New perspectives on designing and implementing professional development for teachers of adults, New Directions in Adult and Continuing Education*, (no.98. pp.31-38). San Francisco: Jossey-Bass.
- Cranton, P. & Wright, B. (2008). The transformative educator as learning companion. *Transformative Education*, 6 (1), 33-47. DOI:10.1177/1541344608316961
- Daines, J., Daines, C., & Graham, B. (1988). *Adult learning, adult teaching*. Cardiff: Welsh Academic Press.
- 藤森陽子（2018）. 教員の主体的・自発的学びにつながる「ラーニングプログラム」の構築に向けてー教員の研修に関する一考察ー 教育学研究論集, 13, 33-40.
- 堀哲夫（2012）. OPPAの基本的骨子と理論的背景の関係に関する研究 山梨大学教育人間科学部紀要, 13, 94-107.
- 堀哲夫（2018）. 資質・能力を育てる教育評価に関する研究ーOPPA論を中心としてー 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要／教育実践学研究, 23, 305-317.
- 堀哲夫（2019a）. 新訂一枚ポートフォリオ評価OPPAー一枚の用紙の可能性ー 東洋館出版社
- 堀哲夫（2019b）. OPPA論誕生の背景とその理論ー学びと指導の過程および教育の本質との関わりを中心にしてー 山梨大学

- 教育学部附属教育実践総合センター研究紀要／教育実践学研究, 24, 255-272.
- 小池源吾・志々田まなみ (2004). 成人の学習と意識変容 広島大学大学院教育学研究科紀要, 53 (3), 11-19.
- 国立教育政策研究所 (2020). キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書. 生徒指導・進路指導研究センター. 令和2年3月. Retrieved from [https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career\\_SogotekiKenkyu/pdf/ver\\_all.pdf](https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_SogotekiKenkyu/pdf/ver_all.pdf) (December 22, 2021)
- 国立教育政策研究所 (2021). キャリア教育に関する総合的研究第二次報告書. 生徒指導・進路指導研究センター. 令和3年10月. Retrieved from [https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career\\_SogotekiKenkyu/pdf/2nd\\_ver\\_all.pdf](https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_SogotekiKenkyu/pdf/2nd_ver_all.pdf) (December 22, 2021)
- 工藤亘 (2017). キャリア教育の変遷と職業観・勤労観の形成支援からみた教師の役割に関する研究—キャリア発達段階と体験学習を踏まえた自己冒険力の育成を視座に— 教育実践学研究, 20, 83-99.
- 久我直人 (2009). 教師の『省察的思考』に関する事例的研究—問題を抱える子どもに対する教師の省察の過程を通して— 鳴門教育大学研究紀要, 24, 94-107.
- Mezirow, J. (1991). *Transformative dimensions of adult learning*. San Francisco: Jossey-Bass Higher & Adult Education Series. (メジロー, J. 金澤陸・三輪建二 (監訳) (2012). おとなの学びと変容—変容的学習とは何か— 鳳書房)
- 三村隆男 (2008). 新訂 キャリア教育入門 実業之日本社
- 三輪建二 (2018). おとなの学びとは何か—学び合いの共生社会— 鳳書房
- 文部科学省 (1999). 中央教育審議会 初等中等教育と高等教育との接続の改善について (答申). 平成11年12月16日. Retrieved from [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm) (November 14, 2021)
- 文部科学省 (2011a). 小学校キャリア教育の手引き<改訂版> 教育出版
- 文部科学省 (2011b). 中央教育審議会 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申). 平成23年1月31日. Retrieved from [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf) (November 14, 2021)
- 文部科学省 (2015). 中央教育審議会 これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申). 平成27年12月21日. Retrieved from [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf) (November 25, 2021)
- 文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領解説総則編 平成29年告示.
- 文部科学省 (2021). 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して—全ての子どもたちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現— (答申). 令和3年1月26日. Retrieved from [https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf) (November 11, 2021)
- 中國昭彦・堀哲夫 (2017). OPPAの汎用性に関する研究—附属小学校校内研究の推進を中心として— 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要／教育実践学研究, 22, 125-142.
- 新潟県教育委員会 (2011). 新潟県キャリア教育パイロット事業協力者会議 新潟っ子をはぐくむキャリア教育のすすめ. Retrieved from [https://www.nipec.nein.ed.jp/sc/careerstation/download/houkokusyo\\_1syoush.pdf](https://www.nipec.nein.ed.jp/sc/careerstation/download/houkokusyo_1syoush.pdf) (January 18, 2022)
- 西村宗一郎 (2020). コロナ禍後の社会変化とキャリア教育を考える 北里大学教職課程センター教育研究, 6, 55-66.
- 西岡由郎 (2018). 小学校におけるキャリア教育の推進・充実を図る実践的方法についての研究—基礎的・汎用的能力育成の観点に立った特別活動との連動— 奈良佐保短期大学研究紀要 (特別), 65-75.
- OECD (2019). OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework Concept note: OECD Learning Compass. Retrieved from [https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD\\_Learning\\_Compass\\_2030\\_concept\\_note.pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf) (December 20, 2021)
- 大田区立矢口中学校 (2019). 学びに向かう力を高めるキャリア教育—教科指導・進路指導を通して— 研究発表集
- 佐藤学 (2015). 専門家として教師を育てる—教師教育改革のグランドデザイン— 岩波書店
- Schön, D. (1983). *The reflective practitioner: how professionals think in action*. London: Temple Smith. (シヨーン, D. 佐藤学・秋田喜代美 (訳) (2001). 専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える— ゆみる出版)
- 田中里佳 (2011). 成人学習理論を用いた教師の意識変容に関する研究—小中連携・一貫教育事業に参加した教師たちの事例分析— 日本教師教育学会年報, 20, 99-110.
- 田中里佳 (2016). 変容的学習論に基づく教師の実践的知識の発達過程に関する研究—若手教師の事例分析を通しての一考察— 日本学習社会学会年報, 12, 78-89.
- 山崎祥・七條正典 (2013). 小学校段階におけるキャリア教育の推進の現状と課題に関する一考察 香川大学教育実践総合研究, 27, 45-54.
- 吉村憲治・山田智之・沼田大輝・豊田隼・加藤賢・福田一仁・岩井隼人・宮島康則 (2022). 教育活動の意義付けによる教師の学びを促進するための実践的研究 上越大学教職大学院研究紀要, 9, 123-131.
- 吉武聡一・西山久子 (2011). 小学校におけるキャリア教育の推進に関する動向と実践上の課題 福岡教育大学紀要教職科編, 60 (4), 191-202.



# A case study on teachers' transformative learning from the perspective of career education

Hayato TOYODA\* · Tomoyuki YAMADA\*\* · Yudai SASAYAMA\*\*\* ·  
Hiroki NUMATA\*\*\*\* · Kazuhito FUKUTA\*\*\*\*\*

## ABSTRACT

During the VUCA era, the need for teachers to continue learning and career education is increasing. This study aimed to grasp the situation of teachers' awareness and perception of career education and transformative learning and to obtain data that will contribute to future teacher learning in career education. Because of a survey and intervention research, which was conducted mainly through the school partnership report, the school partnership conference, and the school partnership passport, we obtained results that contributed to metacognitive valuing in daily educational activities, by encouraging the embodiment of existing perceptions and professional knowledge regarding career education. These measures provided an opportunity to promote transformative learning by individual teachers and by the team and provided educational suggestions that contributed to the formation of a practical foundation for career education to be implemented throughout the school education system.

---

\* Integrated Graduate School of Medicine, Engineering, and Agricultural Sciences, University of Yamanashi \*\* School Education

\*\*\* Joetsu University of Education (Professional Degree Program) \*\*\*\* National Outfitters Training School

\*\*\*\*\* Tsubata Municipal Tsubata Junior High School